

「つながりの分断と共助への試み—コロナ禍のタイ」

発表要旨

木 曾 恵 子（日本学術振興会／宮城学院女子大学）

本発表では、タイ農村の地域コミュニティでみられる親族関係を基礎とする相互扶助について、コロナ禍で受けた影響を事例として取り上げ、考察した。タイ東北部の農村において、2004年から断続的におこなった調査、およびコロナ禍以降の2回（2022年8月、2023年8月）の調査がもとになっている。コロナ禍において、地域コミュニティの相互扶助的つながりには分断が生じた一方で、限定的ではあっても、困難を経た人びとが相互に支える力になる実践としての「共助」への試みもみられることを指摘した。

タイにおける新型コロナウイルス感染症のまん延と政治の混乱

まずはタイにおける新型コロナウイルス感染症拡大の状況と、背後で興隆した政治の混乱について整理した。タイは中国以外で感染者が報告された最初の国であり、2020年3月にはバンコク都及びその周辺の一部商業施設、学校をはじめとする公共施設の閉鎖、飲食店の営業はテイクアウトのみ（生活必需品販売店は営業を許可）など「ソフトなロックダウン」が実施された〔岡野 2021〕。ただし5月以降は100日間市中感染ゼロを記録し、WHOからもコロナ封じ込めを評価された。とはいえ、同年12月には首都圏を中心に感染が再び拡大し、翌年4月の大型連休以降は、地方への感染拡大が深刻化していった。

また2020年7月頃から、若者による民主化運動が本格化した。2014年のクーデター以降、影響力をもつ軍事政権への反発が、コロナ禍での経済対策の遅れなどと相まって、中高生を含む若者を中心とする民主化や王政改革を求める抗議運動として活発化した。

コロナ禍の地域コミュニティにおけるつながりの分断

次に、東北タイ農村の地域コミュニティにおける相互扶助をめぐるつながりについて、コロナ禍で分断が生じた例を報告した。急速に少子高齢化するタイでは、パンデミック以前から社会保障制度の脆弱さの一方で、家族や親族、および地域コミュニティの自助、共助に注目が集まってきた。東北タイ農村では妻方居住と末娘相続慣行に基づき、世帯をこえた妻方の親や姉妹を中心とする親族とのつながりが、同地の「ケアの潜在力」〔速水 2019〕として構築されてきた。協働や共食、および育児や介護などケア実践の互酬関係を基礎とし、現在では子どもを農村の実家に預けて都市部で働く子育て世代や、地域コミュニティにおけるボランティア活動として、血縁を超えて高齢者や病者、障害者を支える姿がある。

しかし首都圏でのソフトなロックダウンとともに、全土においてステイホームの願いが出された

結果、相互扶助をめぐるつながりの一部には分断も生じた。首都圏で働く労働者の多くが帰省し、思いがけず普段は離れて暮らす親子の時間の確保につながることもあったが、その一方で世帯をこえたひらかれた関係性のなかでおこなわれていた協働や共食、ケア実践は、世帯単位へと縮小した。とくに高齢者や子どもの活動範囲は、長引く休校や子ども会活動の停止、あるいは寺院での活動や年中行事の停止（葬儀関連のみ実施）、病院の緊急時のみ対応などもあり、各自の家の中や所有する田畑に制限され、他人とのコミュニケーションも共に暮らす世帯員に限られる傾向にあった。子どものスマホ依存やオンライン授業による格差は、社会問題としても取り上げられている。

またコロナ禍以前からではあるが、ステイホームへの応答によって各世帯のプライベートな空間の確保も加速した。家の周りに囲いや門扉を設置し、ひらけていた高床式住宅の1階部分に壁や扉を取り付ける家が増え、常時施錠するようになった。これまで通りすがりに見えていた家にいる高齢者や子どもの姿は、地域住民の目に映りにくくなっている。

共助へ向けた取り組み

つながりが分断した一方で、地域コミュニティにおける共助への試みも注目されている。

まず、ステイホーム生活で孤立しがちな住民を定期的に訪問し、必要な支援とつなぐ役割を果たしていたのは、保健ボランティアである。保健ボランティア制度は、保健省下にある区健康増進病院を中心に、地域コミュニティで住民自身が病気予防や健康増進活動、高齢者や障害者、妊婦や乳幼児への定期訪問をおこない、フォーマルな医療資源不足の充足を図ろうとするものである。2020年現在ボランティアの数は、100万人を超える。コロナ禍では感染予防やワクチン接種の管理、感染した場合の情報管理を徹底し、地方農村での感染拡大を抑えただけでなく、通院者の代わりに病院で薬を受け取り、各世帯への配達などもしていた。その際、医師目線の薬の成分表示から患者目線の薬効表示へ変更するなど、臨機応変に細やかなケア、自発的な支援をおこない、大いに存在力を発揮した。

また子どもや高齢者の「居場所づくり」を通して、住民自身が相互扶助をめぐる地域コミュニティのつながりを再構築しようとする姿もあった。出稼ぎする親と離れて暮らす子どもの多いある農村では、スポーツセンターや一般家庭を開放した勉強や遊び、食事の場を設けていたものの、コロナ禍で集まることができず、子どもや高齢者の孤立が深刻化した。しかし住民でもあるスタッフが地道な家庭訪問をおこない、個別の困難を丁寧に組み上げ、共有し続けた。現在は、有機農業やオーガニック・マーケットを通して人々をつなげ、プロジェクトの運営資金にするなど、新たに地域コミュニティがつながる場所を生み出している。

コロナ禍のタイ地方農村では、とくに高齢者や子どもの孤立が顕在化した一方で、住民による「顔の見える関係」に基づいた共助を通じた持続可能な暮らしが模索されている。

引用文献

- ・速水洋子編（2019）『東南アジアにおけるケアの潜在力—一生のつながりの実践』京都大学学術出版会
- ・岡野英之（2021）「ソフトなロックダウン下での「怯え」—タイにおける社会的経験としてのコロナ禍」浜田明範他編『新型コロナウイルス感染症と人類学 パンデミックとともに考える』水声社、pp. 248-266